【朝倉地区人権啓発情報センターだより】　2025（令和7）年 2月28日（金）

みんなの“人権”が尊重される『まちづくり』への《懸け橋》

No. 69

発　行：
人権啓発指導員
【大 楠　茂 美】

…1945（昭20）8.8夕刻に、ソ連は日ソ中立条約を破棄し、翌日午前0時、満州・ソ連国境を越えて奇襲攻撃を開始。11日には樺太（カラフト）に侵攻。甚大な犠牲だけでなく、約70万人もの軍人・民間人を捕虜にし、そのうち60万人以上を拉致・抑留した。そして、シベリア三重苦と呼ばれる飢餓・重労働・酷寒の生活を強いられ、約10万人もの犠牲者を出した。これが『シベリア抑留』である。…（長勢 了治 著【新潮選書】「シベリア抑留」）

…若い人たちよ。戦争を知らない人々よ。（中略）彼らは 戦争で死んだのではないのだ。戦争が終わってから、酷寒のシベリアで、容赦のない銃口の前で、住むに住む家なく、食うに食なく、着るに衣服なく、病に薬も休養もなく、ひたすら酷使され、ある者は歩きながら、ある者は座り込んだまま、ある者は倒れたまま、さらにある者はどこかへ連れ去られたまま、その命を落とした。…（1975〔昭50〕年 慰霊法要にて 抑留者「ヤゴダ」会の訴えより）

…あれから、80年の歳月が過ぎた新聞の一面に、次のような記事が掲載されました。…

うちにも戦争があった（あなたの家族の軌跡）

あの子は曾祖父の自責　シベリア復員後、養女なぜ…

（2025【R7】.2.12（水）：西日本新聞朝刊の一面に掲載）

「曾祖父は、1943年8月、37歳で徴兵されて陸軍に入隊。旧満州で終戦を迎えたもののシベリアに抑留されて、12/4、ネーブルスカヤ収容所に入る。そこはシベリアの奥地で氷点下40度にもなる極寒の地だった。…過酷なシベリア抑留の後、京都：舞鶴港へ引き上げる際、知らない女性から「娘を連れて帰って!」と女児を託されるも逸（はぐ）れてしまい、そのまま帰国の途に…。その後、一人の女児を養子に迎えたという。それから約10年後、曾祖父は55歳で急死した。出征時、祖父は4歳。人としても幼子の父としても、子どもを見捨てることは本意じゃないという自責の念が、酷寒の地でも消えずに、せめてもの償（つぐな）いとして、戦後に養子を迎えたのではないか？　真実は誰にも分からない。ただ、（はっきり言えることは…）あの戦争は、今日（こんにち）のわが家に確実につながっている。…養子として

迎えられた女児は現在92才に…。養護施設に預けられていたことや、11歳で曾祖父に引き取られたことなど、ご自分の生い立ちを語り、最後に「私はずっと幸せだったよ。施設でも、養子先でも、とても感謝しているよ。」という文章で、締めくくられていました。

〝戦争〟という時代に翻弄されながらも、その時代その時代を、懸命に生き抜かれた人々の生き様から、生きる(生かされる…)かけがえのない生命(いのち)のこと、…そして、今、生を受けている自らのこと、考えさせられています。

「シベリア抑留者の手記より」～さし絵～

懸け橋No.28で、一昨年96歳で旅立った私の父が、旧制中在学中、少年飛行兵に志願し、シベリアに抑留され、京都：舞鶴港に復員したことを書きましたが、当時のことは一言も語らず(語れず)に旅立ったことと重なり、また、偶然にも、当時18～19歳だった父の写真が…!!

「収容所(ラーゲリ)での酷寒の地で、どんな生活をしていたのか？　どんな想いで舞鶴港に降り立ったのか？やっとの想いで帰郷したものの、自分の居場所がなく、実家を出ての再出発から96年の生涯を全うした父。

生前、「ただ、生きて戻ってこられただけでいい。亡くなった戦友の想いの分も生きること、それだけで…」とよく言っていた言葉を、ふっと思い出しては、古希目前の自らに置き換え、想いを馳せる…今日この頃です。

福岡県出身の古賀清資(せいすけ)著『私のシベリヤ捕虜物語』に…。【後方左端が父】

2/24(月)の西日本新聞朝刊に、侵攻された国抜きの大国同士で、〝21世紀版ヤルタ会談再現(…80年前、3大国の一方的取り決めが、戦後国際社会の構図を決定付けたように、大国有利の終戦条件確定を狙う…)〟という記事が…!!

…新大陸発見以来、五百有余年にも及ぶ、あたかも〝陣取り合戦〟のような大国優先の領土拡大に、翻弄され続けた歴史的事実について正しく学び、これからの未来に確かに繋げていくことを、切に願っています。再び、同じ過ちを二度と繰り返さないためにも !!

〝力の論理、力の均衡…〟ではなく、真に、誰もの人権(⇔生命)が尊重される世界を築いていく確かな積み重ねが、SDGS(持続可能な開発目標)の実現をめざすことに…。

～誰もが〝生まれて よかった〟と実感できる社会を、私たちみんなで !!～